

嵐山だより

— 古典に学ぼう —

(公財)郷学研修所・
安岡正篤記念館評議員
高橋 大輔

【第五回】学ぶとは、どういふことか

古典というと、難しい漢字や昔の言葉が並ぶ、少し近寄りにくいものを思いうかべる人もいるかもしれません。しかし、古典は必ずしも、難しいばかりではありません。

書道の学習でも、はじめから難しい漢詩を書くわけではありません。ひらがなや画数の少ない漢字から始めて、慣れてくると、熟語や故事成語、絶句、漢詩へと関心が広がる人もいます。

古典を学ぶことも、それと同じです。最初から一冊すべてを理解しようとしなくても、一つの言葉にふれ、「もう少し知りたい」と思うところから、その世界は少しずつ広がっていきま

す。
今回取り上げるのは、『一〇〇の古典・一〇〇

のことば』です。中国と日本の代表的な百の古典から一つずつ言葉を選び、その意味を分かりやすく紹介しています。今回は、その中から四つの言葉を選び、「学ぶとは、どういふことか」を考えてみます。

「切磋琢磨——昨日の自分をこえて

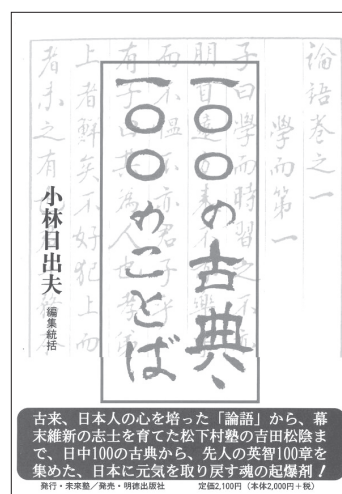
最初に取り上げるのは、『詩経』の「切磋琢磨」です。

「切」「磋」「琢」「磨」はいずれも、骨や角、玉などを切り、削り、形を整え、さらに磨き上げることを表します。そこから、学問や技芸を重ねて、人が自分を高めていく意味に使われるようになりました。

「切磋琢磨」と聞くと、友達や仲間と励まし合い、たがいに高め合う姿を思いうかべます。もちろん、それも大切です。しかし、くらべる相手は、いつも自分以外の誰かとは限りません。

昨日よりも少し、ていねいに書けた。前より落ち着いて筆を運べた。以前は書けなかった字が、書けるようになった。そのような小さな変化も、自分が磨かれていることのしるしです。

友達の字から学ぶこともあれば、昨日までの自分から学ぶこともあります。だれかに勝つことだけではなく、自分を少しずつよくしていくこともまた、「切磋琢磨」であることを『詩経』は教えてくれます。



『一〇〇の古典・一〇〇のことば』
(未来塾／明德出版社、小林日出夫編)

『小学』と『大学』——心と行いを整える

次は、『小学』と『大学』です。ここでいう「小学」や「大学」は、今の小学校や大学などの学校を表した言葉ではありません。

『小学』は、礼儀や人との接し方など、毎日の生活の中で身につける、人としての基本を教える書物です。その中に、明道先生と呼ばれた北宋の儒学者・程顥(ていこう 1032～1085)の人となり伝える言葉があります。

程顥は、一人でいるときには泥で作った像のように姿勢を正し、常に自らを厳しく律して過ごしていましたが、人に接するときには、その場を包み込むような温かさがあつたといえます。

自分には厳しく、人には温かく接する。一見すると簡単なことのようですが、実際に続けるのは難しいものです。

一方の『大学』には、国を治める前にはまず家庭を整え、その前に自分の身を修め、さらに心を正す、という順序が示されています。

社会の大きな問題について考えることは大切です。しかし、その出発点には、自分の心と毎日の行いがあります。『小学』が日々の振る舞いや人との接し方を教える一方で、『大学』が、その学びを家庭や社会へと広げていきます。大きなことをする前には、まず自分の足元を整えることが何より大切なのだ。二つの古典は、そのことを教えてくれています。

「一灯を頼りに——一歩ずつ前へ

最後は、江戸末期の儒学者・佐藤一斎(さとう いっさい 1772～1859)が著した『言志四録(げんししりく)』の一つ、『言志晩録(げんしばんりく)』です。そこには、次の一節があります。

「一灯を提(さ)げて暗夜を行く。暗夜を憂(うれ)うなかれ。只(ただ)一灯を頼め」

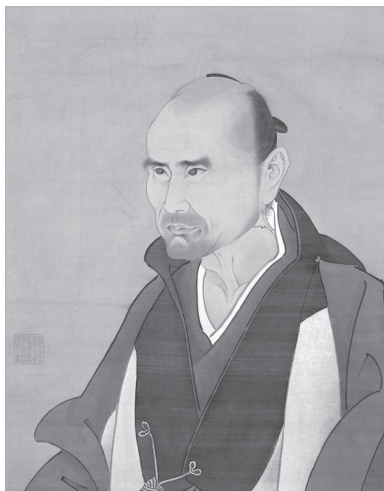
暗い夜道では、遠くまで見通すことはできま

せん。それでも、手元に一つの灯があれば、次の一歩を確かめることができます。

勉強や書道の稽古に限らず、あらゆることは、すぐに答えが見つからなかったり、思うように上達しなかったりするものです。「自分にはできない、無理ではないか」と、不安になることもあるでしょう。

そのようなとき、自分自身がこれまで学んできたことや、少しずつ積み重ねてきた努力が、自分を支える一灯になります。すべてが見えるまで立ち止まってしまつのではなく、「自分の中にある小さな光」を頼りに、一歩ずつ進むことを『言志晩録』は教えてくれます。

『詩経』は、昨日までの自分をこえて、自分を磨くことを説いています。『小学』と『大学』は、心と行いを整え、その学びを人や社会へ広げることが教えています。そして『言志晩録』で佐藤一斎は、先が見えないときにも、自分の一灯を頼りに歩くことの大切さを述べています。学ぶとは、ただ物知りになることではありません。昨日までの自分から少しずつ前へ進み、一日一日をていねいに積み重ねていくことなのだと思えます。



「佐藤一斎(五十歳)像」渡辺華山筆
文政四年(一八二二)

重要文化財・東京国立博物館蔵
(<https://webarchives.tnm.jp/home>)